【初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト】

中学生の児童労働についての探究学習に、文化人類学研究室の関谷雄一先生がアドバイスを行いました

2025.7.10

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター（CASEER）では、「初等中等教育における探究学習への支援プロジェクト」において、児童生徒の発意や関心に基づく探究学習に対して専門の研究者が的確なアドバイスをすることにより、探究の成果をいっそう高度で充実したものとすることをねらいに、東京大学の教員もしくは大学院生がオンラインを通じて支援・指導を行っています。

今回は、埼玉県の中学２年生Ｉさんの「児童労働について」の探究学習を通して出てきた疑問や悩みに、文化人類学研究室の関谷雄一先生がアドバイスしました。

・探究のテーマ：「児童労働について」
・相談者：Ｉさん（中学２年生）
・探究学習の取組単位：個人
・アドバイスした人：東京大学文化人類学研究室 関谷 雄一教授
専門：開発人類学、応用人類学、農村・社会開発、
震災復興、地域創生、人間の安全保障、アフリカ、日本
→ 関谷先生のページへ
・コーディネーター：教育学研究科 本田 由紀教授

みんなが知っているかもしれないことでも、あなたがまとめて自分の言葉で周りの人に伝えることに意味がある

Series 1 . 児童労働について

Ｉさん：私は学校の探究の時間で、児童労働をテーマに探究を進めています。私はこの探究で、働く子どもたちがいなくなる社会を実現するために、児童労働の事実を広め、児童労働を見て見ぬふりをする社会の風潮を変えるということ　を学習目標に設定しているので、今日は、実際に児童労働が行われているアフリカの地域など、その問題が起こっているところに行って活動している人の声などを聞かせていただきたいなと思っています。また、日本でも児童労働はあるのかについてもうかがいたいです。

関谷先生：実は、事前に送っていただいた質問を拝見して、私の方でそれに答えられるような簡単な資料を用意したので、まずはそれをご覧いただきながらお話を進めていきたいと思いますが、よろしいですか？

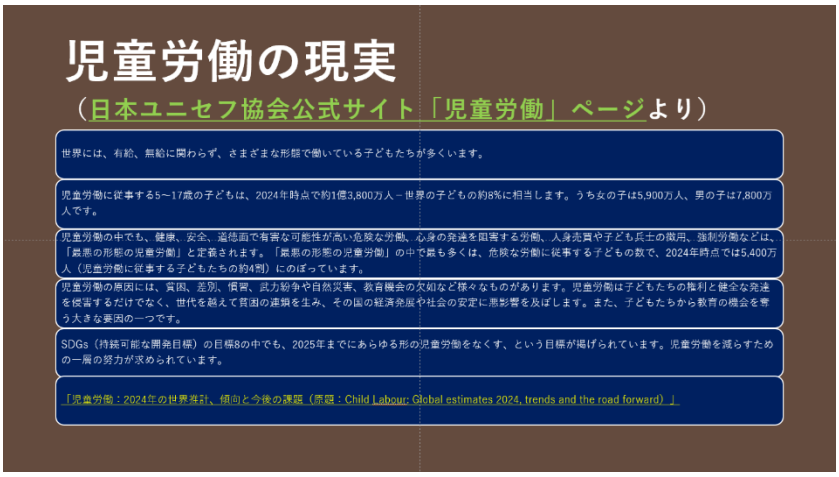
Ｉさん： はい、お願いします。ありがとうございます。

関谷先生：私の専門は文化人類学なんですが、30 年ぐらい前に、今は JICA ボランティアという名前になっていますが、当時は青年海外協力隊という仕事で 2 年と 6 カ月、西アフリカのニジェール共和国というところに行って木を植えていたんですね。そこでは農村の子どもたちと一緒に遊んだり寝食を共にしたりしていたので、その時の思い出もちょっと含めて、このプレゼンを作っています。

それから、これはもう知っていると思うんですけど、ILO（国際労働機関、以下 ILO と表記）と UNICEF（国連児童基金、以下同様）から、非常にわかりやすい資料が英語で出ていてインターネットでダウンロードできますので、こちらも参考になると思います。
→ ILO & UNICEF 「児童労働：2024 年の世界推計、傾向と今後の課題（原題 ： Child Labour: Global estimates 2024, trends and the road forward）」,2025

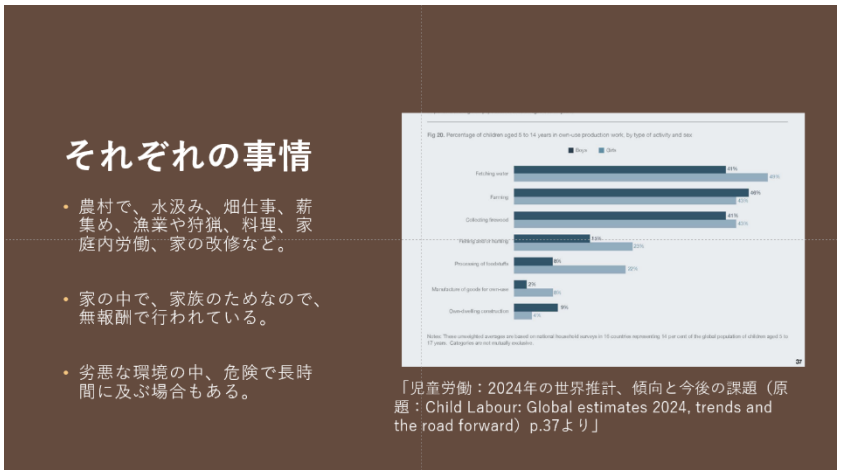
児童労働については、さっき言ってくださったように、お給料が払われているかいないかにかかわらず、子どもたちが働いている現状っていうのは結構あるんですね。 2024 年の時点で世界中で 1 億 3,800 万人。そのうち女の子が 5,900 万人、男の子が 7,800 万人と、男の子の方が若干多いんですけれども、計算すると 10 人に 1 人くらいというたくさんの子どもたちが、アフリカだけではなくて、アジア、ラテンアメリカなどの発展途上国で、仕事をしているという現状があります。とても残念なことです　。そして、児童労働の中でもとりわけ危険が伴うような仕事は、最悪の形態の児童労働というふうに定義されていて、これをなるべく減らそうという試みが行われています。SDGs（持続可能な開発目標）の目標 8 の中でも、2025 年までにあらゆる形

の児童労働をなくす、という目標が掲げられています。2025 年というと今年なんですけれども、実現は難しいということが、言うまでもなくわかります。



その背後には、さまざまな事情があります。

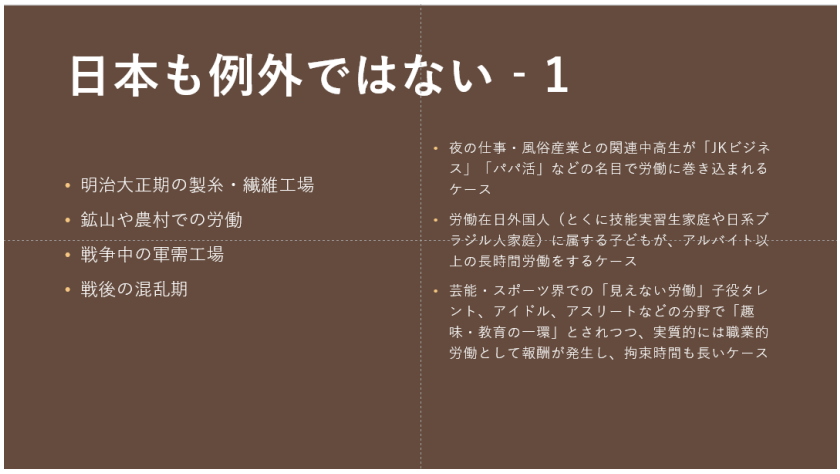
下のグラフは先ほどの ILO&UNICEF の資料にあったものですけれども、どのような仕事をしているかというと、農村では水汲みとか畑仕事とか薪集め、魚釣りとか狩猟ですね。家庭ではお料理とか、家業の手伝いに子どもたちが引っ張り出されたりしています。しかし残念なことに、こういった仕事は家のことや家族のための仕事なので、子どもに直接お給料が支払われることはなくて、それも問題です。普通、親の仕事を何か手伝ったら、お小遣いとかもらえるはずなんですけれども、こういうことをやっている家には貧困家庭が多く、その余裕もない。



劣悪な環境のなか、仕事が危険で長時間に及ぶ場合もあります。代表的なものは、既にご存知かもしれないですが、廃棄物処理場のゴミの山などで、親と一緒に資源ゴミを集めてブローカーに売るといった危険な仕事があったりするわけですね。 それから、農園や工場で働いたり、路上で何か小さなものを売ったり、車の窓拭きを車が止まる一瞬でやろうとしたりとかですね。

あるいは戦争のある国の中では、子ども兵士っていうのがいるんですけれども、戦場で働かされている。それから性　産業にも、子どもが駆り出される現状がやっぱりあります。

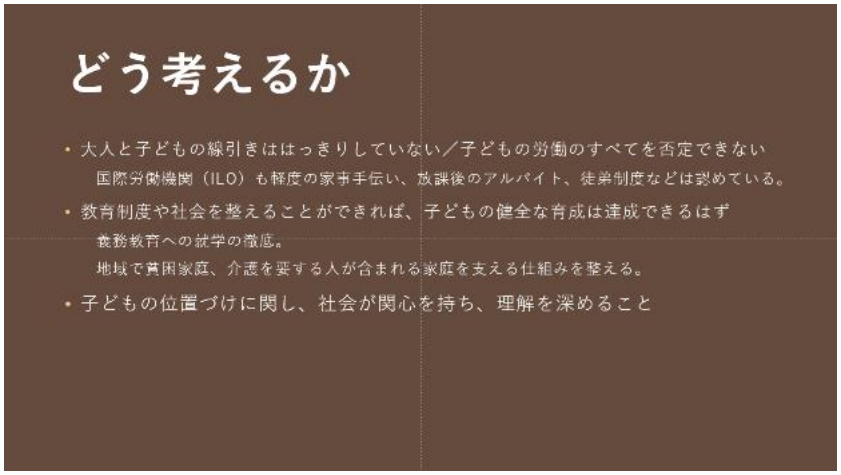
そして、残念ながら日本においても、昔から子どもたちが、いろんな仕事をさせられてきたという現実があります。



例えば明治大正期の製紙工場や繊維工場で女の子たちが駆り出されて働いたり、鉱山や農村での畑仕事などでも子どもたちが働かされたりしてきた歴史があります。 あるいはこれは僕の叔父がそうだったんですけれども、太平洋戦争中に、学校にも行けないで、軍需工場でネジなどを作らされたり。あるいは戦後の混乱期に市場などで、やっぱり子どもたちが生き延びるために、いろんなものを売ったり作ったり。また、現代でも、残念ながらなんですけれども、夜のお仕事とかで、中高生がJKビジネスといった形で労働に巻き込まれるケースもあります。 それから、在日外国人の子どもたちが、アルバイト以上の長時間労働をさせられるケースや、芸能界やスポーツ界で、子どもたちが、小さいうちから訓練を受けることもあります。これは非常に特殊な例なのかもしれませんが、本当にその子どもたちの人権が守られたビジネスになっているかというと、必ずしもそうではないような現実もあります。

それから、私自身が関心を持って調べていることとして　、ヤングケアラーの問題があります。家族の中に介護の必要な人や重度の障害を持った人などがいて、お父さん、お母さんが仕事で出かけている間、そういった人のケアをする子どもたちがいます。その中には、学校にも行きたいのに行けないような状況の人もいて、しかも報酬があるわけでもない。そういう状況に陥っている子どもたちもいます。

そういったことを含めて、私たちがどう考えるかについては、観点が３つくらいあるのではないかと思っています。



一つは、歴史的なことを考えると、実は大人と子どもの線引きというのはそんなにはっきりしたものではないんですね。人類の歴史の中では、子どもは家で大人と同じように仕事をすることが普通だった時代が長くて、学校に通ったり、親の保護を受けたりする存在になったのは、現代になってからです。それを考えると、子どもの労働をすべて否定するということはできないような気がします。

これは、I さんも後で調べていただくとわかりやすいと思うんですが、ILO の規定の中でも、家庭の家事を手伝ったり、放課後にお小遣いを稼ぐためにアルバイトをしたり、あるいはアフリカとかでは小さな子どものうちから職人について仕事を学ぶという制度があるんですね。徒弟制度と言うんですけれども、そういったものはやっぱり伝統的にあって、認めている場合がありますね。ILO もそれは否定していない。だから、子どもの労働がすべてダメということは言えないんじゃないかなと私は思います。これは後で I さんにご意見があればぜひ聞かせていただきたいと思います。

それから二つ目として、教育制度や社会を整えることができれば、働かされる子どもが減って、子どもの健全な育成が達成できるはずだとも言われています。 例えば、義務教育になるべく多くの子どもが参加することや、介護が必要な人がいる場合は、子どもに任せずにケアマネージャーやヘルパーさんが見てくれるというような仕組みを整えることができれば、ヤングケアラーもなくなるはずなんですね。

でも最も大事なことは、そういった子どもの位置づけということに関して、社会自身が関心を持ち、理解を深めることだと思います。ですので、今回 I さんがこのテーマに関心を持って色々調べながら、少しずつ理解を深めて、それを友達や先生や、周りの人たちと共有して拡げていかれるということは、とても大事なことなんですね。ぜひ、頑張ってほしいと思います。

最後に、日本語で読みやすい書籍や Web サイトを参考に挙げておきますので、ご興味があればぜひ見てみてください。

〔参考となる書籍、Web サイト〕
・上間陽子著『裸足で逃げる－沖縄の夜の街の少女たち』太田出版, 2017
・キャロル・オフ著、北村陽子訳『チョコレートの真実』英治出版, 2007
・アマドゥ・クルマ著、真島一郎訳『アラーの神にもいわれはない－ある西アフリカ少年兵の物語』人文書院, 2003
・アミン・シェイク著、 中川雅里名訳『あなたのおかげで僕がある－インドの元ストリートチルドレンの半生―』自費出版, 2023
・澁谷智子著『ヤングケアラー－介護を担う子ども・若者の現実 』中央公論新社, 2018
・一般社団法人日本ケアラー連盟公式サイト

私からのお話は以上になります。さーっと話してしまったので、もし何か分からないことがあれば、遠慮なく聞いてくださいね。

I さん： 本当に、その大人と子どもの境目がはっきりしていないっていうのは、調べていく中でもすごく思っていたことでした。例えばその子が望んでいたら児童労働にならないのかとか、定義が難しいなってすごく感じました。

関谷先生：そうですね。例えば徒弟制度についても、アフリカの子どもたちは、お年寄りに認められることや大人として扱われることをとても重要なことだと捉えていて、学校の先生に褒められることよりも、そういったことで自分の生き方に自信を持ったりする、そういうプロセスがあるんですね。 そういった、生きがいとして行う仕事のことをディーセントワークと言うんですが、私のかつての学生で、今は労働基準監督官になっている人の修士論文のテーマが、まさにその「子どものディーセントワークをどう考えるか」というものでした。その学生の出した結論は、子ども自身が生きがいだと感じられるような仕事であれば、やってもいいんじゃないか？ というもので、私は素晴らしいと思って読んだんですけれども、これに対しては色々な見方があって、それはやっぱり子どもの人権を妨げるのではないかとか、先生方の間でも意見が割れました。それだけ難しい話なんです。

私自身も、アフリカの農村にいた時、恥ずかしながら自分のシャツなどを近くの川で子どもに洗ってもらっていたんですね。水汲みも村の女の子がやってくれていて、もちろんそれに対する対価は払っていたんですが、あれを児童労働だと言われると、ちょっとまずいなと思っていて。要するに農村ではそれが自然になされているわけなんです。農村の子どもたちにとっては、大人のために家事を手伝うことは、非常に自然なことで。でもそれがエスカレートしていくと、例えば親の代わりに町に働きに行かされる、などということになってしまう。だから、気をつけていないと子どもらしい生き方を奪われてしまうとい

うのは、本当にそうなんです。

　じゃあどうすればいいのかということなんですけれども、先ほどご紹介したILOとUNICEFの報告書の中では2つポイントが挙げられていて、1つは制度的な教育の徹底なんです。 やっぱり子どもはなるべく学校に通わせるということ。 学校に通っている時間は働けないわけですから、毎日真面目に学校に通ってもらって、一定の時間勉強をすることで、できれば高等教育につながるようなキャリアパスに進んでくれるというのが、望ましいということ。

　もう1つは、社会の中で子どもが働く環境をなるべく作らないように、大人たちが子どもを見守りながら、そういう仕事を与えないこと。貧しいから子どもも働かないと食べていけないという理屈もありますが、必ずしも食うに困ってやっているわけではないケースも多々あります。そういう状態の子どもをできるだけなくしていくことが大事です。

Iさん　そうすると、結局、法律とかそういう話になってきますよね。

関谷先生：そうですね。基本的には法律がしっかりしていれば、それに基づいてこの仕事はやっていい・これはダメとか、子どもにはちゃんと義務教育を受けさせるといったことができるはずなんですが、ご存じの通りアフリカのような貧しい国では、その制度自体がしっかりしていないので、法律で大人と子供をはっきり区別して、子どもには教育を受けさせるということがなかなか難しい状況もあります。また、法律や制度が整っていても、例えば学校からドロップアウトしてしまったり、不登校になったり、いろんな形で学校に行けない子どもたちが行き場を失ってそういう仕事に手を出してしまうといったこともあるわけですよね。だから法律や制度を整えたからといって、必ずしもそれだけでうまくいくわけではない。

　どうしたらいいんでしょうね。 難しいですね。

　私は、先ほども少し申し上げたように、やっぱり社会がそういうことに関心を持つことということが一番大事なのかなと思います。 正しい答えはすぐに出ないけれども、みんなで一緒に児童労働について考えてみようっていう場を作ること。 それはとっても大事だと思います。日本の若い人で、児童労働のことを知っている人は、そんなにいるわけじゃないと思うので。

　あと、日本ではどうなのかというところに、Iさんが興味を持ってくださったこともとても大事で、日本でも、やっぱりそういうことが起きているんですよね。実際に、大変な状況に追いやられている子どもたちがいるわけなので、そういったことも多くの人に知ってもらうべきだと僕は思います。

Iさん：その、みんなに知ってもらうためのポスターに掲載する内容が、まだあまり定まっていなくて。児童労働の現状を伝えることが目的で、形としては、現地の

状態を知っている方のインタビューを掲載したり、今おっしゃっていただいた、児童労働のどんなことが問題で、どういうところが難しいのかといったことを掲載しようと思っています。ただ、児童労働の何が悪いかっていうところが、しっかり定まってないというか、わからないところがあるじゃないですか。なので、それをどういうふうに伝えればいいのかが、難しいなと思っています。

関谷先生：そこは、難しいですね。ポスターは１枚なんですか？

I さん：はい、１枚を考えてます。

関谷先生：なるほど、まず１枚という限られたスペースに何の情報を盛り込むかっていうのは、私たち研究者の世界でも、一番苦しく悩むところなんです。いろいろ調べると、あれもこれも大事みたいに思うんですけど、そういう時に私だったら、「何を一番伝えたいか？」っていうところから考えると、自ずとポスターの書き方っていうのが定まってくるのかなと思います。そのポスターは誰に見せるんですか？

I さん：　学校の生徒に向けて見せるんですけど、全体の計画としては、学校でまずこのプロジェクトに協力してくれる人を募って、Teams を使ってグループチャットを開いているので、そこで意識調査アンケートをしようと今作成中です。まずは意識調査アンケートとテスト形式の筆記調査アンケートを行なっておいて、作成したポスターを見せた後に、もう一度同じアンケートをとって、どれぐらい理解度が深まるかという比較もやろうと思っているんですけど、そのテスト形式のアンケートを実施するってなったときに、やっぱり明確な答えが出てないとダメだなって思って。

関谷先生：児童労働に関しては、わからないこともあるけれども、はっきりしていることもあるわけですよね。例えば ILO の規定では、軽度な家事労働は認めている。一方で、劣悪な環境の中での労働というのは認めていない。そういった○×とかで質問を組み立てていくと、案外面白いクイズになるかもしれないですね。 また、I さんから最初にいただいた相談では、児童労働はやっぱり撲滅しよう！という話だったと思うんですが、僕が知る限りにおいて、それはとても難しいんじゃないかなと思います。 難しい理由はいろんな次元で言えるんですけど、だからこそ、児童労働を全てなくすことはできない？ みたいな問いかけをすると、人は色々と反応してきますよね。僕だったらそういうクイズを作るかもしれないですね。

　あとは、とっても大変な作業かもしれないけど、先ほどご紹介した参考書籍の中には、かなり当事者の声が入っています。なので、そういうものも参考にしていただくと、よりリアリティのあるクイズを作ったりできるんじゃないか

なぁと想像しています。

I さん：ありがとうございます。難しいなと思うのは、明確な定義がないこともそうですが、実際の声だとどうしても夜のお仕事の話だったり、学校で言うのはよくないみたいな感じの雰囲気もあるんですが、この辺も深めていった方がいいか、それよりも先ほど聞いたヤングケアラーのようなことに重きを置いた方がいいかということを考えながら聞いていました。

関谷先生：そうですよね。僕も先ほどお見せした資料を作るときに、そこはすごく悩んだところです。そのうえで、今回ご紹介した本は、広く一般に読まれていて、社会学者も高く評価しているような本を選びました。とはいえ大事なのは、リアルな話を伝えるということも手法の一つですが、そこまでは伝えなかったとしても、何が起こっているかを想像してもらうことだと思っています。なので、労働内容についての具体的な表現ではなく、例えば国連や UNICEF の報告書を参考に、どのぐらいの子どもがそういう仕事に関わっているのかとか、日本では今どういったことが起きているのかなど、数字や別の方法でも工夫して伝えることはできると思います。

　そしてそれを、I さん自身の言葉で伝えることが、やっぱりすごくいいなって思います。ヤングケアラーなんかもそうですが、本当に同世代の人たちに起こっていることだったりするので。なので、いろいろ難しいところはあるかもしれませんが、そういうデリケートなところは排除して、事実をちゃんと伝えるということができていればいいんじゃないでしょうか。

I さん：ありがとうございます。

あと、私の学校は、環境活動とかを結構行っているので、児童労働についても知っている人はかなり多くて、ポスターを作ることに本当に意義があるのかと悩んでいるんですけど、どんなポスターにしたら、すでに知っている人も知識を得られるものにできるのかなと思って。

関谷先生：確かに、I さんご自身が調べていくうちに、みんなが絶対知らないっていうことが出てくれば、それはそれでいいんですけれども、例えば我々の研究の仕事でも、みんなが知らないことをパイオニアとして発見するっていうのは、実は一生に一度あるかないかくらいなんです。ちなみに僕はまだ経験したことがないです（笑）。でも、I さんが児童労働をどういうふうに考えてポスターに表現するかということは、I さんにしかできないし、誰も真似できないんですね。で、僕はそれがオリジナリティだと思っているんです。 なので、無理して新しい発見をみんなに見せようとか、そんなことを思わなくても大丈夫です。そうじゃなくて、まずは、事実としてあることを正確に伝えるということが、I さんのポスターを見る人にとって、とても大事なことだと思います。あと、

そういうことを調べていくうちに、I さん自身がどういうふうに考えたかということ。環境問題などを扱っているお友達の方は、児童労働について一部は知っているかもしれないけれど、I さんのように真っ正面から調べて、全部を知っているわけじゃないですよね。 そうすると、I さんのポスターが正確であればあるほど、そういう人たちにとっては発見になるんですね。 自分が知っていることっていうのは、意外と当たり前になっていて、面白くないんですよ。これも研究をしているとよくあることなんですけど、自分が一生懸命調べていると、こんなの誰でもわかってるんじゃないかという感覚になって、意外とつまんなく見えるんですけど、人にとっては面白かったりするんです。今回、I さんから最初にいただいた相談のなかで僕がすごく面白いなと思ったのは、日本にもありますか？っていう疑問。その質問をいただいたからこそ、ヤングケアラーってそうなんじゃない？ みんな何も言わないけど、あれこそ児童虐待で、日本社会で児童労働以上に問題視されるべきなんじゃないかって僕は思うんですけれども、なかなかドンピシャで、そういうことを論じている本っていうのはなくて。これは I さんが寄せてくださった質問に、僕が啓発されて感じたことで、だから、I さんのポスターを見るのをとても楽しみにしています。

本田先生：お二人の話から刺激を受けて、私からも 1 点。関谷先生のお話のなかで、児童労働の全部が悪いわけじゃないっていうことが出てきましたよね。その一方で、例えば子どもがトラックに荷物もろとも轢かれて死んじゃうなんていう悲惨なことは、絶対にあってはいけないと思いますよね。児童労働にも幅があるけれど、じゃあ一体、何が認められる児童労働で、何が認められないのかっていう分け方が気になりますよね。ILO などは、軽度の家事労働なら OK といった例も出していますけれど、例えば I さん自身が考える、これだったら許せるとかこれは絶対ダメという基準は何か、児童労働を見る時にどういった軸があり得るのかということについて調べたり考えたりしたうえでまとめてみたりするのも、とてもいいポスターができるんじゃないかなと感じました。

I さん：ありがとうございます。頑張ります。

関谷先生、本田先生：ぜひ、頑張ってください。これからの展開を楽しみにしています。

■支援ミーティングを終えて

I さんより：
専門家である教授と直接お話できたことで、日本国内の児童労働について知ることができ、インターネットではなかなか知り得ることができない情報を得ることができました。また、自分の成果物において、本当に良いものなのか自信がなかったのですが、教授に

後押ししてもらえたことで自信を持てました。これからもこの経験を生かし、探究に励みます！ ありがとうございました。

関谷先生より：
『児童労働』という難しい課題に日本の中学生が独学で取り組む姿に心を打たれました。難しい課題でも、時間をかけて考察していくうちに、いつか解決に繋がる光が見いだせるのではないかと思います。 その考察の過程を大切に、ぜひ頑張ってください。